

露伴「史伝」の戦中戦後

——松下英磨の軌跡——

目野由希

1 本稿の目的

本稿は、いわゆる露伴「史伝」なる概念は、いかなる過程で形成され、現在に至ったか考察するのを目的とする。

2 『露伴全集』中の「史伝」

現在、図書館や古書店で入手しやすい幸田露伴の全集は、『露伴全集』（岩波書店、一九四九～五八）の、第二版（一九七八年発行）だろう。このうち十五卷、十六卷、十七卷は、それぞれ扉に「史伝 一」「史伝 二」「史伝 三」とある。今、いわゆる露伴「史伝」を読むなら、この三卷を使うことになる。

そこで、順序通り全集の十五卷から手に取り、露伴「史伝」とは何かを知ろうとした読者は、いささかの戸惑いを覚えることになる。

十五卷「史伝一」の収録内容は、およそ無秩序な上に、「後記」には「この第十五卷は「史伝」の中、第十六卷・第十七卷に収められる

ものの外の史伝類四十四篇を収める」と記されているからだ。

十五卷には、明治二十三（一八九〇）年～昭和十六（一九四一）年の間の、短い作家論や講演の速記録、古典作品研究、考証や伝記などが並べられている。この期間は、彼の文壇登場すぐから晩年近くまでであり、露伴の文学者としての人生のほぼ全てに重なる。

つまり、十五卷の露伴「史伝」は、鵬外「史伝」と異なり、執筆開始時期で定義されるジャンル概念——次第に虚構を嫌い始めた露伴が、日露戦争後に開始した歴史記述ジャンル——では、ないことになる。

内容も多岐にわたる。短い「考証」（十九卷）や「評論」（二十四卷）ならば、それぞれ別巻にまとめられている。すると「史伝」は、「考証」でも「評論」でもないジャンルとなるのだが、例えば十五卷収録の明治三十三（一九〇〇）年「読蕉翁語録」は、なぜ「考証」ではないのか分からない。

ちなみに、全集十六卷には、露伴「史伝」と一般に想定される『頼朝』『平将門』『蒲生氏郷』『為朝』『論仙（仙人呂洞賓／扶鸞之術／活

死人王害風』『蘇子瞻米元章』が収録され、十七巻にも同様に、『武田信玄』『日本武尊』『今川義元』『太公望』『王羲之』『洪沢栄一伝』が収まる。十六巻は明治四十一（一九〇八）年から大正十五（一九二六）年、第十七巻は昭和二（一九二七）年から十四（一九三九）年の作品を収録。十六巻と十七巻収録の作品群は、露伴「史伝」として知られる作品に合致しており、発表時期もほぼ露伴「史伝」として順当である。

もし、『露伴全集』の十五巻のジャンル概念の混乱の謎を、「史伝」の中、第十六巻・第十七巻に収められるものの外の史伝類」という矛盾した「後記」の定義に限れば、答えは簡単に出る。

現在の岩波書店『露伴全集』第二版の底の、昭和二十四（一九四九）年版『露伴全集』の第一期は、第二十三巻までである。第一期配本のうち、十七巻は昭和二十四年八月（第一期では三番目）の配本、十六巻は昭和二十五年四月（第一期では九番目）の配本。十五巻は遅れて昭和二十七年五月（第一期では十九番目）の配本。十五巻は、露伴「史伝」と想定されるテキストに、旧全集未収録資料を加えようとする内容である。新資料群は明治四十一（一九〇八）年以前の作品も含むため、年代順では十六巻・十七巻の前にも置ける。そこで、「第十六巻・第十七巻に収められるものの外の史伝類」と思われた資料は、十五巻目にまとめて収録した、ということなのだろう。

「史伝」自体の定義の混乱を棚上げにしまえば、これでひとま

ずの解決がついたかに見える。しかし、昭和二十四年版の『露伴全集』月報を確認すると、話はさらに紛糾してくる。

芭蕉評釈の巻の月報の、最終頁を眺めてみよう。

第十九回配本 第十五巻 史伝一 史伝は露伴の晩年の実り多き文学領域を成すにいたつたが、代表作「頼朝」「蒲生氏郷」「論仙」「太公望」などのやうには世に知られていない比較的短編に属するものを集め、又「元時代の雑劇」「読史後語」「将棋雑話」「魔法修行者」等の雄篇をも併せ収めた。

という次回配本広告箇所と、

○次回配本は第十五巻「史伝一」で、単行本・旧全集に収められずにあつた「芭蕉と其角」「山口素堂」「蘭亭帖」「一切経の伝」「史記の作者」「漢書の作者」「道二翁」「楠正成公東大寺の洪鐘を動かせし事」「織田信長」「前田利家」の十篇を含む四十余篇を収めます

という「編纂室より」コーナーが、連続しているのである。

「編纂室より」では、単行本・全集未収録資料を十五巻に収めたとのみ説明している。とはいえ、未収録考証資料は、「考証」の十九巻にも、「孔子と穆姜」など九篇が含まれる。伝記的・随筆的な短い考証で、単行本・全集未収録の新資料の全てが十五巻収録なのではない。ところが次回配本広告箇所の方では、「代表作「頼朝」「蒲生氏郷」

「論仙」「太公望」などのやうには世に知られていない比較的短編に属

する」史伝だと編纂者（蝸牛会）が新解釈した「史伝」を、十五巻に加えたと説明する。

ここで「史伝」のうち、「世に知られていない」「短編」や「雄編」だとされる資料のうち、「魔法修行者」などは、戦前の全集に既に収録された作品である。なぜ選択されたかが不可解であり、新資料の紹介とは性格を異にする。

以上のように、現行の『露伴全集』での「史伝」概念は混乱している。あるいは、次回配本広告の執筆者と、「編纂室より」執筆者の間には、そもそも露伴「史伝」についての共通認識がなかったのかもしれない。

以上の「史伝」概念の混乱は、一九二〇年代末から一九四〇年代末までの露伴とその遺族・関係者、岩波書店、そして中央公論社の動きを追っていけば、起こるべくして起こった混乱だと説明できるだろう。

3 個人全集とアンソロジー

実は戦前の露伴全集（岩波書店、昭和四（一九二九）～昭和五（一九三〇）年）には、「史伝」篇という分類はなかった。第一巻から三巻までは「小説」篇、第四巻は「小説 第四―別纂」で『魔法修業者』や『骨董』が収録。第五巻は「小説 第五―別纂 笑話・少年読物」で、『弓太郎』『休暇伝』等と一緒に『伊能忠敬』や『運命』が並ぶ。第六巻は「戯曲」で『満寿姫』『名和長年』『清系縁起』等収録。

第七巻は「論文」、『努力論』『修省論』『悦楽』『二国の首都』。第八巻が「芭蕉七部集抄」、第九巻が「文学論考 文学雑誌」序・跋・解題・批評・自序。

次の第十巻「紀行・人物評論」が、『春の一日』『うつしゑ日記』『日本武尊』『平将門』『為朝』『頼朝』『武田信玄』『蒲生氏郷』『今川義元』『二宮尊徳―少年の為に』等で、現行のいわゆる露伴「史伝」が含まれる。第十一巻は「随筆」で『折々草』『潮待ち草』他、第十二巻は「雑纂」で『論仙』『普通文章論』等。戦前の個人全集では、現行の「史伝」は小説や少年読物、そして人物評論や雑纂に散らばり、まとまりのある一群としては扱われていない。

昭和四（一九二九）年のこの全集では、編纂と校正は露伴の弟子漆山又四郎が行った。漆山は、収集した全集用資料を露伴のもとに持ち込み相談するが、「漆山さんが全集に集録するものについて質している。先生は『いかんいかん、そんなもの入れてはいかん』と漆山さんの説を切り捨ててしまう。漆山さんが不⁴平相に口を尖らせて抗するが一向相手にしない⁴。つまり、露伴自ら編集に関与し、その結果として、当時の全集では「史伝」篇が存在しないのである。

一九四〇年代に入り、『露伴史伝小説集』（中央公論社）刊行。この頃から露伴「史伝」概念が確立し、大きな存在となってゆく。獅子文六は元来露伴好きではなかったが、「戦争中、私は読むものに困り、本屋の棚に手の動いた僅かなもの、中に、偶々、「幻談」とか「洪沢栄一伝」とかがあつたに過ぎない」という縁から露伴ファンとなり、

「後にも先にも、もの書く人にお目にかゝりたいと思つたのは、露伴先生のみであつた」というほど入れあげる。中野好夫曰く、「これに案外私は、露伴臨終に近く気紛れなジャーナリズムが、何思つてか俄かにヤイノヤイノと騒ぎ立てる大分前から、この史伝物の愛読者だつたのである」。このように、露伴と「史伝」がそれとして騒がれるのは、明治四十一（一九〇八）年の『頼朝』執筆時には、考えられなかつたことなのである。

『露伴史伝小説集』巻一は昭和十七（一九四二）年、巻二は昭和十八（一九四三）年に刊行。しかし昭和十九（一九四四）年には、中央公論社は強制的に解散させられるので、予定されていた巻三・巻四は刊行されずに終わっている。

巻一も巻二も、過去の作品を編集し直ただけで、新規の解説もない。これまで論じられてこなかったのも当然であろう。このアンソロジーの構成を確認すれば、戦後の全集編纂に与えた影響を、ある程度推測できる。

予定されていた小説集の内容構成は、以下の通りである。

- 第一巻 「頼朝」「武田信玄」「今川義元」
- 第二巻 「幽情記」「暴風裏花」「太公望」「楊貴妃と香」「怪談」
- 第三巻 「運命」「魔法修行者」「成吉思汗」
- 第三巻 「日本武尊」「為朝」「蒲生氏郷」
- 「楊貴妃と香」「魔法修行者」は、現行の岩波書店版全集の十五巻

「史伝二」に収録されている。「幽情記」「暴風裏花」「運命」は「小説」「怪談」は「研究」、『成吉思汗』は「戯曲」。

「魔法修行者」は、第三巻収録予定作品だ。刊行直前で企画が会社ごと潰れた中央公論の担当者は、さぞや無念であつたろう。しかし数年後、彼は蝸牛会メンバーとなる。そして、中央公論社での企画消滅後、五年ほど経た岩波書店の『露伴全集』刊行の際に、彼はようやく、「魔法修行者」を「史伝」と名付けて世に送り出せたのである。

他人には「小説」でも、彼にとつてだけ「世に知られていない」「史伝」であつた「魔法修行者」。あるいは昭和二十四年版全集月報で十五巻の広告文を書いたのは、彼だったのかもしれない。かりに彼が「魔法修行者」編集に関与していなかったとしても、戦後の岩波書店版に新たに加わった「史伝篇」の存在は、中央公論社による戦時下のアンソロジーの影響下にあると考えられよう。

戦前の全集では「小説」だった作品が、こうして戦後になって始めて、露伴「史伝」になったわけである。

この編集者の名は、松下英磨である。一九四〇年代の松下、そして中央公論社は、どんな状況で露伴と関わっていたのだろうか。

4 その頃の松下英磨

露伴「史伝」が「発見」され、鷗外「史伝」の次に大きな扱いをうけ、そしてその後、すぐさま忘却の長い季節が訪れる。この推移と松下英磨の動向は、ほぼ連動している。

まず、『露伴史伝小説集』が出た頃の松下はどんな様子であったか。昭和十七（一九四二）年、『横浜事件』で『中央公論』編集長畑中は休職、南方旅行中で不在の黒田秀俊以外は全員更迭された。同年、すでに『中央公論』編集局長であった松下は、以後一九四四年まで雑誌『中央公論』の編集も兼任。嶋中社長は体調がすぐれず、社の編集業務の多くは彼の手に委ねられた。例えば岩上順一『歴史文学論』（中央公論社、一九四二）の「あとがき」謝辞箇所では、真っ先に「私のこのやうな出発について好意ある友情を寄せてくれた松下英磨氏」と、松下の名が挙がる。

『歴史文学論』では、嶋外「史伝」と「歴史文学」の相違、語の用法は大きな揺れを見せるものの、基本的に「史伝物」は「歴史文学」の一種として扱われている。そして、芥川や藤村の歴史小説同様に、露伴「史伝」も嶋外の「史伝／歴史小説」の準備段階のような存在にすぎないとの論調が全体を貫く。露伴だけではなく、露伴の甥にあたる高木卓（＝安藤熙）の作品も、嶋外に及ばないという理由で、あまり褒められない。

松下は中央公論社では露伴番であり、露伴没後は蝸牛会メンバーであった。幸田文の回想録⁸、土橋利彦（＝塩谷賛）の『幸田露伴』等で、彼はその育ちのよさや生真面目さ、献身、剣道の腕前を褒められ、文人画に対する鑑賞眼と知識も評価されている。

そんな松下だが、露伴は敬愛の対象としては嶋外の次のようである。あるいは、『歴史文学論』編集の補完作業として、彼は『露伴史伝小

説集』を企画編集したのだろうか。

当時の彼の、嶋外・露伴に対する姿勢は、そのまま戦後の文学研究での嶋外・露伴研究のあり方に続いている。

嶋外の「興津弥五右衛門の遺書」が、軍神乃木殉死の影響を受けて執筆・改稿され、その時点から空前絶後の国民的な嶋外「史伝」ジャンルが創造された云々という一九四〇年代的なファンタジー¹⁰は、もちろん嶋外在世中の大正十一（一九二二）年までは存在しなかった。一九三四年から一九四四年までの嶋外賞賛論の膨大な出現に伴い、突然現れたのである。当時の評論家小林秀雄に端を発したこの説は、戦後は、小林を批判的に継承して評論家となった柄谷行人が、引き継いでいる。

戦時下の歴史文学へのこのオブセッションは、戦後に継承される。現在の嶋外研究における作品論／「いわゆる史伝」論／一種独特な作家論、そして戦後の文学研究／教育の原型は、この『歴史文学論』が源流になっていると見てよい。

戦後の「いわゆる史伝」「歴史文学」論の論旨の混乱、特権化された嶋外論の濫觴として、岩上の『歴史文学論』刊行が果たした役割。露伴番だったはずの松下英磨による、意外に低い露伴評価。そして何より、中央公論社在職中の松下による、岩上への『歴史文学論』執筆の慫慂と、その補完のように編集される、露伴「史伝」の作品集。

これらは、現在の露伴「史伝」評価と研究状況の考察にあたって、看過できない出発点である。

戦後の鷗外「史伝」の特権化と露伴「史伝」の忘却も、戦後になつて時間の経過とともに登場した現象ではない。篠田一士は、「昭和二十年代の終り頃だったと記憶するが、田中西二郎氏が現代小説の隘路を打破しようという底意をあらわにした大変戦闘的な露伴再評価の一文を書き、露伴に還ることを提唱した。すかさず、文壇評論家と進歩的国文学者の反撃があつて、折角の提唱もこれといった実を結ばないまま立消えになつてしまつた」と嘆くが、果たしてこの通りなのだろうか。

戦後の松下の軌跡を確認しよう。

戦後、中央公論社でも公職追放がなされ、松下も追放対象となる。公職追放は「裁判のような形式ではなく、行政処分的な形態をとつており、「不当な審査を救済する意味で日本政府は後に「訴願委員会」を設けるが、これは政府側に必要な人材の救済に発動されるばかりで、実質的な機能は果たさなかつた」。そのため追放措置は、「占領軍と日本政府の諮意的選択によつて行われ、真の軍国主義的温床の除去にはなり得なかつた」とされる。松下もこの処置に不満だったようだが、社内の問題もあつたためか、『中央公論社七十年史』（中央公論社、一九五五）は、戦後の同社再建メンバーに彼の名を含めていない。

松下はここで「洗心書林」という書店を創設する。店名は露伴の『洗心録』から採つたもので、店名考案の際には露伴に相談している。その様子は土橋利彦や幸田文、また当人の手によつて描かれるが、そ

れは（当人の記述を除き）まるで、追放などないかのような穏やかさである。この情景は、大方の露伴を愛する読者には既読感がある。多くの読者は、松下とともに露伴の身近にいる小林勇の、類似する前例——小林が戦前、一時岩波書店を離れ、露伴と相談し「鉄塔書院」を設立した様子——を、松下の新会社設立と重ねながら読むだろう。露伴は、娘文子とともに楽しく語らいながら、松下のために新たな出版社の名をつけあぐねつつ、高度な教養を示す。その様は、終戦の頃の出版業界の慌しい現状とは、およそかけ離れている。ここだけは、まだ「戦前」なのだ。

松下にとり、この露伴の命名の儀式は、小林の事例を介した昭和十年代の編集者のユートピアの、無意識的再現でなくて、何であろうか。後述するように、出版社の昭和十年代は暗黒時代ではなく、むしろ隆盛期であつたと近年判明している。松下が懐かしみ、想像的に同化しようとした小林勇（『伝説的な編集者』——岩波茂雄の息女（『見識ある書店としての岩波書店』——露伴（『当代有数の学識者』）の三者が形成する戦前の出版人ユートピアも、現実には反戦主義や学芸至上主義を土台にしていたわけではないのは、すでに明らかである。

松下は洗心書林創設に際し、露伴の『音幻論』の原稿を励ましのように受け取つた、と懐かしく回想する。ただし洗心書林で本稿に重要なのは、斉藤茂吉『幸田露伴』（洗心書林、一九四九）だろう。これまでの茂吉の露伴論や作品解説・露伴を詠んだ歌等を編集したこの書の巻末には、「本書を発行するにあたり、幸田文子さん、小林勇さん、

土橋利彦さん、松下英磨さんに多大のお世話になったことを感謝いたします。昭和二十四年五月。斉藤茂吉」とある。これは、蝸牛会主要メンバーではないか。

5 「もの書き」幸田文のポジション

昭和二十三年当時を、歌詠みでもあった松下は以下のように回想している。

茂吉との対話は、いつも露伴に終始し、短歌そのものについて一言も触れたことのないのは自分ながら不思議なことであった。そして、いい露伴全集を出したい、それまで自分も生きていたいといった。そのころすでに話のすんでいた『新版露伴全集』は、版元は岩波書店であるが、編纂は蝸牛会ということに決っていた。この会は便宜的に作ったものだが、遺児幸田文はむろんのこと、斉藤茂吉、柳田泉、小林勇、土橋利彦と私の六人で構成し、事務の一切は土橋君が処理することになっていたのである。

洗心書林での茂吉の『幸田露伴』刊行に協力したメンバーに、戦時下で露伴への聞き取り調査を経て『幸田露伴』⁽²⁰⁾を刊行した柳田泉が加わり、蝸牛会は構成されている。その茂吉は、全集の第一期発行中に没する。幸田文は資料整理や月報へのエッセイ執筆に忙しかつたろうし、土橋は事務一切を担当。残りのメンバーが編集作業の中心になったのは、容易に推定される。そして、このメンバーは当時、公職追放

中の松下をかばいながら活動していたはずである。あるいは、追放の身の松下を陰で支えた知友がそのまま「蝸牛会」となり、『露伴全集』の編集グループへ移行したのではないか。

そうなると、昭和二十年代末に「文壇評論家と進歩的国文学者」がアンチ露伴を標榜したというのは、露伴だけではなく、『露伴全集』を編纂した公職追放組への距離感表明の意味を含めて、考えるべきかもしれない。

アンチから一転し、遺族である幸田文ブームが一九五五年から始まるのは、幸田文の文学的資質の開花と同時に、当時の時代相の変化が寄与していないだろうか。中央公論社が幸田文のためにはかったメディア戦略⁽²¹⁾——父の場合（一九三五〜一九四三）と娘の場合（一九四五〜一九六〇）の「中央公論社による幸田家プロデュース」——は、一貫している。戦中のメディアの隆盛（父）は、十年以上ブランクを置き、より拡張され、戦後のメディアの隆盛（娘）に連続したのだろう。前述の岩波茂雄が一九四五年に東京市議会に立候補したのも多額納税者としてであったし、一九四二、三年頃には、岩波ほか出版人たちが豪勢な別荘を建てた。近年の高田理恵子の研究や佐藤卓巳の調査⁽²²⁾などが明らかにするように、書籍の刊行は一九四四年こそ減少するものの、昭和十年代中盤には、書籍の売り上げ高は、むしろそれまで以上だった。

再び松下に話を戻そう。松下は、一九五〇年にはすでに洗心書林をたたみ、中央公論社に復帰した様子だ。高浜虚子『芭蕉』（中央公論

社、一九五二)の「序」は、やや不満げにこう書かれている。

一日、中央公論社の松下英麿君が見えて、私の俳話の中から芭蕉に関する記事を纏めて見たが出版する考はないか、とのことであった。私は芭蕉を論じようと思へば、その俳句を見るよりもその連句を見る方がよいとかねがね考へて居る。連句では芭蕉も近松門左衛門、井原西鶴等と同じ軌上を歩いてゐるものときさへ思はれるのである。芭蕉として一冊の書物を発行するならば、ぜひその点に言及したいと思ふのであるが、今はその暇がない。

昭和二六年初秋

鎌倉草庵 高浜虚子

まるで、松下が勝手に、自分の過去の文章を編集して刊行してしまつた、と宣言するかのような「序」である。

露伴は特に晩年、芭蕉評釈に心血を注ぎ、評釈のし残しを柳田国男に託したい、と希望したという。柳田は露伴追悼文中で、その逸話を語る。それが露伴没後すぐの話であつたのに、数年後の『露伴全集』編集時、現実はどうであつたか。

露伴全集の編集がはじまつて助手が柳田のもとへ月報の原稿を頼みに行くと、土橋が俳句の雑誌に書いたものは見た、土橋のやつてゐるしごとには何も書かないという返辞だつたという。露伴のもとに通いつめるまえには編集者として柳田邸へも通ひ、「君が国

語の雑誌に書いた論を見ても、みんな賛成だね。褒めい書斎の一隅から出して

「俳句の雑誌に書いたものの月報執筆依頼は、柳田が露伴のだらう。しかし、期待は無効。蝸牛会の同志が肩を寄せ合を飾ろうとしても、また高名も、世間の風は冷たい。文子幸田家のイメージチェンジに資本が蓄積されるまで、蝸牛時代は、一九四五年に始まつところでのこの芭蕉嫌気と、戦中にすでに萌芽があつた、かつて丸山真男の主張したいえば、岩波文化を最もよく研究」という座談会が長く掲居光知、岡崎義恵らそうそう評判が悪く、しかし編集者になつた。

『思想』は、一度姿を消し

達夫が担当、芭蕉俳諧研究の連載は打ち切りになる。当時、出版構造は大きく変革し、「知の伝達のされ方がサロンのなものから、編集者を中心とする開かれたものへと変化した」。その「ことをあらわす格好の例」として、この林達夫の芭蕉論連載切捨てがある、と高田理恵子は前掲書で述べる。時代を正確に読んだ林が、一流の執筆者より一流の編集者が出版文化をリードする状況を、明確にしたわけだ。すると、松下の編集センスは露伴の俳諧評釈を奉じていた戦中から、すでに時代の流行とは、若干のずれを生じていた格好になる。

むろん、一流の学識ある執筆者に売れぬ覚悟で執筆依頼し、学問的に意味ある選集を編むのは、編集者の見識の問題である。売れずとも有意義な出版を志すのは、何よりわれわれ研究者である。筆者には、松下を揶揄する意図は毛頭ない。

重要なのは、戦後になって松下が直面した事態——そしてそれは今日まで継続する——は、戦中からの継続にすぎないことの確認である。松下のように、育ちが良く生真面目な人間にとって幸福なことに、太平洋戦争中は国民の総動員体制が整い、信すべき目標が教条的にすぎるとはつきりし、出版社が国民全体に対して指図すべき内容も明快であった。唯一のテーマは、少なくとも編集者松下にとっては歴史文学論であるとはつきりしていた。そうであればこそ、露伴独特の様式美を備えた「蒲生氏郷」「魔法修行者」などのテキストを、『露伴史伝小説集』と銘打って編集し直し、四部構成に編んで刊行するのにも、岩上順一を誘って『歴史文学論』を出版するのにも、それなりに充実

感が感じられたであろう。しかも、当時はその充実感に、販売高がついてきたはずである。

松下が、戦争賛美者であったか否かは分からない。確実なのは、生真面目な編集者松下が一途に歴史や芸術の価値を信じ、出版市場における価値判断においても戦中戦後を問わず、自身の信念を貫き通したただけだろう。

彼の芸術的嗜好や編集者としてのスタイルは、一九四〇年代前半には時局に適合してはいたが、編集者としてのセンスは、すでに時代遅れになりつつあった。四〇年代後半では、出版業界の大きな変動に加え、彼の感性は、時局にも真っ向から逆らう形になってしまった。

しかし高田理恵子の出版と編集をめぐる考察で、本稿に関し重要になるのは、もしかするとその先かもしれない。高田は、言論文化より編集者の権力が大きくなることと同時に、書き手の二流化に着目する。「この問題は、現在ますます大きくなってきているのかもしれない」という言葉は、幸田文の随筆家としての位置を理解するのに、意外に大切な鍵概念となる。

つまり、当代有数の学識者であった「一流」の露伴が時代遅れになり切った一九五五年を迎えると、むしろ、その父より下の「二流」であることを自他共に認める幸田文が、新たな時代の編集者にとり、使いやすい素材として急遽浮上する。そこで、すぐに目端的に編集者が、〈偉大な父の娘〉「幸田文」を演出。各種文学賞を数年のうちに獲

得させるに至ったのである。⁽²⁾彼女のメディアへのデビューに必要なだったのは、コネクション以上に、編集者の素材になることだったのではない。自分の作品を「作文」などと表現する文が、戦後文学史上に大きな位置を占めている理由は、彼女と編集者／出版社／メディアのパワーバランスから考察すべきではないだろうか。どんなに美しい文章をもにしても、いつまでも「父の娘」扱いされてしまう理由も同様だ。幸田文の演出には、写真が過剰に用いられ、全集販売には景品として「幸田格子」なる反物が付く。こうした一種安っぽい演出は、いたい何に由来するのか。

『露伴全集』の苦しい編纂作業が終わり、幸田文ブームが一九五五年にスタートを切るには、まず露伴が完全に「過去の人」になるまでの時間、大掛かりなメディアミックス戦略が可能になるまでのメディア（＝中央公論社）の体力の回復、そして何より、時代を正確に読み取れる編集者が、必要だったのである。

6 まとめ

いわゆる「史伝」なるジャンルは、作家毎に相当な内容の相違が見られる。そう称される作品群の共通項を追うより、まず「史伝」概念の発生経緯を説明するのが先だろう。露伴「史伝」の場合も、「史伝」とは何か、それは歴史か文学かといった抽象的な問いを立てても空しい。露伴本人は、現行の「史伝」群を「史伝」として一括したこと

はなかったからだ。彼の周辺、特に中央公論社の露伴担当が、ある作品群を「史伝」として編集したのである。

そこで本稿では、一九四二年頃から一九四九年に至るまでの、いわゆる露伴「史伝」編集の中心人物だった松下英麿の行動を、簡単に追ったのである。

一九二〇年代からの出版ジャーナリズムの変容、岩波書店と中央公論社間での「史伝」概念の玉突き現象、そしてひとりの生真面目で露伴に心酔する編集者が、露伴「史伝」概念形成の要になる。

一九二九年当時の岩波書店には、いまだ露伴「史伝」という概念はなかった。鷗外の「歴史文学論」が盛んに論じられた後、『歴史文学論』刊行。さらに同じ編集者によって中央公論社から、『露伴史伝小説集』が途中まで発行。中央公論強制解散後は、彼は岩波書店の『露伴全集』編纂に参画し、挫折した露伴「史伝」集成が完成される。それまで「人物評論」「少年小説」等と分類されていた露伴の作品群は、戦後のリテラシーの低下も加わってか、一挙に謎を秘めた鶴的ジャンル「史伝」へと変容する。

つまり、いわゆる露伴「史伝」概念は、その基礎部分（主要な作品の選択や、『露伴史伝小説集』と名付けられた叢書の一部発行、露伴「史伝」論の登場等）は一九四二、三年頃構築されていたが、最終的な確定をみたのは、昭和二十四年の岩波書店版『露伴全集』刊行時であった、となるだろう。

露伴「史伝」概念とは、昭和初期の「歴史文学論」ブームの頃にそのおおよそが準備されたが、一九四九年になって始めて、ひとりの編集者の信念に基づき、故人となった作者の意図とも時代の要請とも無関係に形成された概念である。³⁰年齢の高い文化人が、自らのやや時代遅れのジャンル概念を復古的に用いて、ようやく限定的な（＝時代錯誤的な）形で創出される。その点に限れば、露伴「史伝」は、いわゆる鵯外「史伝」と同様の概念形成過程をもつといえよう。³¹

註

- (1) 谷崎潤一郎「饒舌録」『改造』（一九三七年十二月一日）、引用は『露伴全集 附録』（岩波書店、一九七九）、一一四頁。
- (2) 『露伴全集』、十五卷、五八七頁。
- (3) 柳田泉は「あがりがま」の自叙を踏まえ、露伴が虚構をつづるのに嫌気がさしたのだという見解をとり、その他の論文も、基本的に柳田の見解を支持する傾向が強い。塩谷賛『幸田露伴』上・中・下（中央公論社、一九六五）ではこれに加え、虚構執筆の途中で露伴はしばしば「興が尽き」ていたと傍証。また井狩章は、『幸田露伴と樋口一葉』（教育出版センター、一九八三）中の「史伝・神仙思想」の章全体で、露伴の「史伝」執筆動機を自然主義への反発とみる。なお茂吉は『幸田露伴』（洗心書林、一九四九）で、「洪沢栄一伝」を「史伝」に含める（一九頁）。戦後の『露伴全集』で、「洪沢栄一伝」を「史伝」に含めたのは茂吉かもしれない。

- (4) 塩谷賛『幸田露伴 下』（中央公論社、一九六八）、九六頁。
- (5) 『露伴全集 附録』（岩波書店、一九七九）、三頁、十一、十二頁。
- (6) 露伴自身も、松下のようにアンソロジー中絶が無念であったかは不明。露伴に師事した土橋＝塩谷の前掲露伴評伝の一九四三年の項には、中央公論社から刊行された「蝸牛庵連話」や雑誌『中央公論』新年号に掲載された「香談」についての言及はあるが、このアンソロジーについては言及がない。松下本人の回想録を含めた他の文献にも、『露伴史伝小説集』についての言及はほとんど見えない。
- (7) 黒田秀俊『昭和言論史への証言』（弘文堂、一九六七）、三六、九六頁など。
- (8) 幸田文『父』（創元社、一九五三）、七一頁。
- (9) (4) に同じ、四七〇～四七一頁。露伴と鵯外の間に溝ができていった理由のいくつかは、同じ評伝の中巻（『幸田露伴 中』（中央公論社、一九八六））に、数箇所言及がある。福本和夫論や伊狩章論などでは、同じ「史伝」作家として露伴「史伝」と鵯外「史伝」の共通項を考察。だが鵯外と漱石が明治末からの作物で、相互に影響しあったと見るのは、作品解釈上からも作家論からも、若干難しい。むしろ、一九四〇年代以降、鵯外と露伴という異なる資質の作家の、異なる型の歴史記述中に、無理を押ししても共通性を読み込んでしまう文芸評論の傾向にこそ、着目すべきではなからうか。
- (10) 拙著『明治三十一年から始まる『鵯外史伝』（溪水社、二〇〇三）では、鵯外が「史伝」を書いたのは、一八九八年の『西周伝』からとした。

- (11) 紅野謙介「解説 中野重治と森鷗外の衝突」、『鷗外 その側面』（筑摩書房、一九九四）、四一五～四一六頁。
- (12) 『幸田露伴のために』（岩波書店、一九八四年）、六四頁。
- (13) 長浜功「解説「公職追放」について」『復刻 資料公職追放Ⅱ—「公職追放」に関する覚書該当者名簿—』（明石書店、一九八八）、九頁。
- (14) 彼の長年の随筆を集めた『去年の人』（中央公論社、一九七七）では、「公職追放」の語の前には、全て「私の理不尽な」という語が着き、やや過剰な拘りを感じさせる。
- (15) 実際、一九五五年刊行の『七十年史』全体に、松下への言及が乏しい。『七十年史』口絵写真ページには、二～三頁目に個人写真で桜井義肇、吉野作造、嶋中雄作、麻田駒之助、滝田樗陰と五人の肖像が並ぶ。もう一葉の写真キャプションは、「Fは昭和十七年上野志保原での座談会、高楠順次郎、高島米峰、杉村楚人冠、麻田駒之助、長澤則彦、龍江義信、土屋詮教、三島海雲、木村省吾、渡辺哲信、嶋中雄作、勝本清一郎、松下英麿氏等の顔が見える」。社員ではない吉野の大きな扱いに比べ、当時重役の松下は、本書全体を通じて「その他」扱いである。
- (16) (4) に同じ、四七一頁。
- (17) (8) に同じ、七一～七二頁。
- (18) (14) に同じ、一一二～一一三頁、一二一頁など。
- (19) (14) に同じ、一五七～一五八頁。
- (20) 柳田泉は一九三三年に「岩波講座日本文学」で「幸田露伴」を担当する。しかし、本稿でより重要なのは、柳田は岩上『歴史文学論』と同様、一九四二年に中央公論社から『幸田露伴』を刊行し、一九四七年になつてこの増補版を眞善美社から刊行している点だろう。一九四二年前後、柳田は塩田良平とともに山田美妙を「史伝作家」として再評価する等の動きを示す。昭和十年代の「史伝」概念形成考察には、柳田の言動は欠かせない。この問題は、別稿で論じる予定である。
- (21) 『幸田文の世界』（翰林書房、一九九八）では、主に第二章「メディアと幸田文」で中央公論社が核になった幸田文ブームを論じている。
- (22) (21) に同じ、「幸田格子一反を百名様に贈呈—中央公論社版全集と幸田格子—」「昭和三十年代、『おとうと』をめぐるメディア・ミックス」を参照のこと。
- (23) 『文学部をめぐる病い 教養主義 ナチス 旧制高校』（松籟社、二〇〇一）
- (24) 『キング』の時代（岩波書店、二〇〇二）
- (25) 「露伴をしのぶ」（一九四七年七月三十一日、東京朝日新聞）掲載。ただし筆者が『定本柳田国男集』第二十三巻（筑摩書房、一九六四）で確認（四二一～四二二頁）した限りでは、露伴を交えた俳諧の思い出の記述に際し、連句を「末流の文芸遊戯」と称したり、「俳諧の解釈など…正面から異を立てるのはよろしくない」と、露伴に異論ありげな風をするなど、露伴の俳諧嗜好にやや距離を置いた書き方になっている。土橋は、『露伴全集』月報執筆者候補としては、柳田を頼りすぎたのかもしれない。
- (26) (4) に同じ、四六九～四七〇頁。
- (27) 小林勇『惜憐莊主人—一つの岩波茂雄伝』（岩波書店、一九八一）、一〇二頁。

(28) (23) に同じ、一七七一―一七八頁。

(29) 中央公論社の山本英吉は、一九四七年には既に幸田文の文才を高く評価していた。『中央公論』昭和二十二(一九四七)年十一月号の「葬送の記」と、約二年後の『中央公論』昭和二十五(一九五〇)年一月発行の文芸特集第二号の「渚の家」を基にして、彼女の初の単行本『父―その死―』発行。執筆期間にかなりブランクがあるが、この間、彼女に執筆継続と発表を勧め続けたのが山本である。同書を創元文庫に入れるよう取り計らったのも同じ山本である(創元文庫版「解説」)。その後一九六〇年頃まで、彼女の活躍期は十年間以上に及ぶが、ジャーナリズムの世界においては「昭和二十二年頃まで、幸田文のスタイルは出来上がっていないかった」(藤本寿彦「それは笑顔で始まった―幸田文のセルフイメージとメディア」『幸田文の世界』、二三五頁)。山本が文に執筆を奨励し始めた時期は、まだ、幸田文に商品価値があるかどうか、不明だった筈である。幸田文の華やかな活躍は、ある程度まで、古参で目の利く編集者山本が導き出したものではなからうか。

(30) 編集者らによって誕生したジャンル及びジャンル名については、近年各分野で研究が進んでいる。ジャンル論は、特に映画研究で興味深い成果をしばしば見るが、例えば京都映画祭実行委員会編『時代劇映画とは何か ニュー・フィルム・スタディーズ』(人文書院、一九九七)中では、田中真澄「時代劇映画史論のための予備的諸考察」が、「時代劇」という語の成立とジャンルの立ち上がり、新聞広告の角書に着目しつつ論述(二三―二六頁)。同じく角書や、雑誌の欄名などからジャンルの編成を調査したベティナ・ギルデンハルト氏(二〇〇〇年十二月九日・

十日、国際日本文化研究センターでのシンポジウム「学芸ジャンルの編成と再編成をめぐる」(第2回「語り・詩・小説・批評」)も重要。わが国の最も優れた映画評論家・研究者の一人である加藤幹朗氏の『映画ジャンル論』(平凡社、一九九六)も看過できない。映画における「ジャンル」とは、ハリウッドの映画産業内で流通のために用いるラベル名を意味する。そのため、書物におけるジャンル分けとは本質的に異なる、との説明が、同書の冒頭に置かれる。しかし、ここで氏の考えるジャンル意識は、どうして学芸ジャンル全般に有効でないことがあるうか。「ジャンル論は、一本のフィルムの特異性をたんに「ひとりの作家の反映」とみなすことなく、投資家と製作首脳部、脚本家、撮影監督、俳優、作曲家、編集者、衣裳担当、そして劇場支配人、映写技師、観客、批評家、そして映画研究者までも含めた社会的交換関係全体の突出点として考察する。このフィルム交換系のなかで、ジャンルは明快な指標として潤滑油のようにはたらく。ジャンルは各スタジオのスタイルでもあったのだ。スタイルとはこの場合、映画のプロット、主題、技術、イコノグラフィにおける共通パターンのことである。」(『映画ジャンル論』より)。

拙著『明治三十一年から始まる『鷗外史伝』でも、第Ⅱ部第二章「雑誌史伝欄とは何か」が、雑誌の欄名が「史伝」ジャンル創造に果たした役割を論じたが、それ以上に重要な論考が、近代日本における「小説」ジャンルの創設に、いかに編集者や読者達が関与したかを解明した、本田康雄「新聞小説の誕生」(平凡社、一九九八)だろう。

(31) 拙稿「明治「史伝」と『鷗外史伝』―明治20―30年代を中心に―」『人文学会紀要』(国士館大学人文学会、二〇〇一年十二月、三四号)

本稿は、二〇〇二年十二月七日、国際日本文化研究センターで行われたシンポジウム「学芸ジャンルの編成と再編成」で発表した目野「立身出世伝と岩波書店―特異な昭和「史伝」形成の一要因―」の内容に、大幅に加筆したものである。旧漢字は「鵬外」の「鵬」以外を新漢字に改め、敬称は略した。コメントを下さった同センター鈴木貞美教授、高島健一郎氏、そして本稿関連資料についてご指導頂いた国士舘大学山本昌一教授に、大いに感謝の意を表す。

（本学専任講師・国語国文学）